ローマ教皇による都市改造に関する研究

――ジュリア通りの敷設と街区形成――

A Study of the Pope's urban intervention in Rome: The construction of *Via Giulia* and the formation of city blocks

住居学科　　片山　伸也
Dept. of Housing and Architecture　　Shinya Katayama

抄　　録　ユリウス二世によって 16 世紀前半にテヴェレ川左岸に敷設されたジュリア通りは，既存の都市中心部と新しい教皇庁の拠点となったヴァティカンを結ぶ直線道路であった。新しい都市の政治的中心を構想したブラマンテの計画は実現しなかったが，パラッツォのファサードが連続するルネサンスの都市空間が実現している。しかし，街区内の建物の壁体の向きを分析することで，中世の街路システムに基づく空間構成を保持する街区と，ジュリア通りの都市軸を参照してそれと直交する空間構成を持つ街区を確認することができた。市街地化が遅れたテヴェレ川岸側にジュリア通りと直交する壁体が多く現れる中で，同時期に大規模な増改築を行ったパラッツォ・ファルネーゼは，ジュリア通りではなく古代ローマの街路システムの軸に沿うことを選んだ。そこには，16 世紀の都市の現実を越えて，「古代ローマの復興」を都市組織のレベルで実現しようとする意図が現れている。

キーワード：ローマ，ルネサンス，ジュリア通り，直線道路，都市組織

Abstract　*Via Giulia*, constructed by Pope Julius II in the early 16th century, was the Renaissance straight street connecting the Vatican and the old center of Rome. Bramante's plan for the new political center of the city did not succeed, but the Renaissance townscape of continuous *palazzo* facade is realized. By analyzing the orientation of the walls of each city block, it is possible to distinguish the city block, with a medieval spatial configuration, from the other, which crosses at a right angle with *Via Giulia*. *Palazzo Farnese*, which was extremely renovated and extended in the same period with the construction of *Via Giulia*, referred to the axis of the street system of ancient Rome, but not the *Via Giulia*. This fact shows the intention to realize "the reconstruction of ancient Rome" in the dimension of urban tissue beyond the reality of the city in the 16th century.

Keywords: *Roma, Renaissance, Via Giulia, straight street, urban tissue*

1. はじめに

ルネサンス期のイタリアにおいては，様々な理想都市が提案される一方で，ピエンツァにおける大聖堂前広場やフェラーラの都市拡張のように既存都市の一部にルネサンスの都市空間を挿入する試みが行われてきた。そのような中で 15 世紀後半からのローマにおける教皇による一連の都市改造は，人文主義的嗜好以上に「永遠の都」に相応しい姿を都市に与えるという切実な課題を抱えていた[1)]。特に 16 世紀前半に敷設されたジュリア通りは，モニュメントを透視図法的に結ぶという意識は曖昧で，中世来の中心市街地と新しい教皇庁の所在地となったヴァティカンを結びつけて機能させるための都市改造であったが，結果として既存の都市組織にルネサンス的な都市軸を設定することになった。

本稿では，既存市街地の周縁部であったテヴェレ川沿いに敷設された直線道路であるジュリア通りが，

既存都市組織にどのような空間構成上の影響を与えたのかを街区を構成する壁体の向きと道路軸の関係から明らかにすることを目的とする。

2. ローマにおける教皇による都市改造

ローマ教皇による都市改造はニコラウス五世（1447-1455 年）に始まるが，中世来の市街地が形成されていたローマ北部とテヴェレ川下流の対岸トラステヴェレ地区をヴァティカンに移転した教皇庁と有機的に結びつけるべく，シクストゥス四世（1471-1484年）とユリウス二世（1503-1513年）は，それぞれテヴェレ川を渡る新しいシスト橋とジュリア通りの建設を行い，ヴァティカンを訪れる巡礼のための道路網整備を通してテヴェレ川両岸の開発に力を注いだ注1。その都市改造には，アウレリアヌスの城壁の内側にありながら稠密な市街地からは外れた周縁部に点在する大教会を直線道路で都市中心部と結ぶことでヨーロッパ各地からの巡礼が記念碑的な大聖堂を容易に訪れられるようにすることの他に，稠密な市街地が将来周縁部へと拡張する際の布石としての意味があったと考えられる[2]。それは，とりもなおさずキリスト教世界の首都であるローマをそれに相応しい都市空間に変貌させることで，アビニョン捕囚とそれに続く大シズマによって失墜した教皇の権威を回復するという目的があったことは間違いない。そのような都市空間の演出は，都市的スケールにおいては主要な大聖堂を直線道路で結ぶ都市計画となって現れ，建築的スケールにおいては枢機卿ら高位聖職者のパラッツォにおけるファサードの装飾となって現れる。大シズマ後のマルティヌス５世の着座（1417 年）以降，ローマで改修あるいは新築されたパラッツォに十字型窓枠 *finestra a crociera* が導入されたのは，歴代教皇による「古代ローマの復興」の意図を端的に表していると言える[3]。

ルネサンス以前のローマにおいて街路空間の様相に大きな影響を与えたのは建築，道路に関する都市条例であり，記録に残っている都市条例の中では，ローマ市民が集まった道路のゴミをテヴェレ川まで捨てに行くことに加えて道路や公共の場に汚物を捨ててはならないなど都市衛生について定められていた。また建築に関しては，公道の障害となるバルコニー，ポルティコの増築などが禁止されている[4]。中世後期からルネサンス期にかけてのパラッツォのファサードの成立と都市における街路空間の直線化を伴う整備の同時性について，筆者はこれまでにシエナを事例として明らかにしてきた[5]。

ルネサンス教皇の時代になると，商工業が盛んになるにつれて交通量が増加し，少なくとも荷車が交差できるほどの道幅が必要となり，中世的な曲がりくねった狭い道路は都市発展の妨げと考えられた。また，住宅は一列に並んだ状態ではなく，中庭－道路を囲むように自由に配列されて不規則な形態であったが，これらの状態を修正するためにも道路に関する都市条例が適用された[6]。15 世紀後半のローマは都市膨張に伴う住宅難の時代でもあり，これを解消するため放棄された空き家は隣家と統合して一軒の住宅とされた。結果として，それまでの間口の狭い住宅が二軒一緒になることで見栄えのするパラッツォへと改築された[7]。15 世紀フィレンツェにはじまるルネサンスの建築文化は，そのようなローマの都市的文脈の中で，高位聖職者あるいは有力家族のパラッツォのファサードとなって次第に都市空間の中に敷衍していったのである。

3. ジュリア通りと 16 世紀のローマの都市組織

3-1　ジュリア通り

ジュリア通りは，ユリウス二世によって中世の街区を縦断するように，1508 年に建設が開始された道路で，産業・商業の中心であったトラステヴェレ地区とサン・ピエトロ大聖堂を擁し新しい信仰の中心であったボルゴ地区を結ぶローマの新しい道路システムとして計画された。ジュリア通りが敷設されるまで，テヴェレ川と並行してシスト橋とサンタンジェロ橋を結んでいた主要道路は今日のバンキ・ヴェッキ通りからモンセラート通りにかけてであり，テヴェレ川岸は十分に整備されていなかったと考えられている[8]。

注1　15 世紀末にコロナーリ通り *via dei Coronari* が実現し，16 世紀の初めにテヴェレ川を挟んだ両岸に二つの直線道路，ジュリア通り *via Giulia* とヴィア・デッラ・ルンガーラ *via della Lungara* が通された。ユリウス二世による計画では，ルンガーラ通りはさらに南へ延長され，トラステヴェレ地区南部のリーパ・グランデ港まで達する予定であった。佐々木 (2005) p.3

16・17 世紀の直線道路，とりわけバロック期の直線道路には起点や終点にモニュメントやオベリスクが設置され，透視図的効果を想定した直線道路が増えていく。一方で，ジュリア通りの起点・終点であるシスト橋およびサン・ジョヴァンニ・バッティスタ・デイ・フィオレンティーニ教会は通りに対して直交しており，透視図法のアイストップにはなり得ていない。しかし，直線道路としてジュリア通りが敷設されると，その両側にはルネサンス風のファサードを持つパラッツォが立ち並んでいった（写真１）。言い換えれば，ジュリア通り北部地域におけるユリウス二世とブラマンテによる敷地割りの整理は，ジュリア通りとテヴェレ川に挟まれた街区において，ジュリア通りに斜めに交わっていたそれ以前の都市の軸線をジュリア通りに対して垂直に整えるものであったともいえる[9]。

そこで，ジュリア通りに面したファサード面の背後に都市のいかなる軸性が隠れているのか，連続平面図による街区ごとの都市組織の分析を行った。分析に当たっては，ローマ大学建築学部作成の実測図[10]に描かれた街区平面図をローマ市の地籍図上に合成して連続平面図を作成し基本図とした（図１）。ジュリア通りに面している街区について，街区内の壁体の延伸方向とジュリア通りの関係で直交するもの（実線）と斜交するもの（点線）を抽出した。街区を構成する建物と前面道路が同時期に形成された場合，地形的な制約を受けながらも街路と建物の壁体は概ね直交するのが一般的である。また，街路に面して町家が立ち並ぶ中世的な街区を想定すると，街区に直交する壁体が短冊状に敷地を分割し，街区の深奥まで伸びると考えられる。そこで，ジュリア通りの敷設と街区を構成する壁体の関係によって街区の形成を分類すると，以下のように考えることができる。

・通りと壁が直交している場合：ジュリア通り敷設後に市街地化が進行したエリア[注2]。
・通りと壁が直交していない場合：ジュリア通り敷設以前からの道路システムに基づいて市街地化したエリア[注3]。

3-2　ジュリア通り北部

ジュリア通りに結節する小路について着目すると，通りの北東側のコンソラート通り，チマトーリ通り，パッレ小路，スガレッリ小路はジュリア通りに対して斜めに結節しているのに対し，通りの南西側にあるラルゴ・ディ・フィオレンティーニ，オルビテッリ通り，チェファロ通りはジュリア通りとほぼ直角に結節している。また，サン・ジョヴァンニ・バッティスタ・デイ・フィオレンティーニ教会からチェファロ小路までのエリアにおいて，ジュリア通りの南西側の街区の壁体は通りに直交しているのに対して，北東側の街区の壁体はバンキ・ヴェッキ通りの湾曲に応じて斜交しているのがわかる（図２）。これらの事実は，ジュリア通りの南西側の街区がユリウス二世とブラマンテによる敷地割りの整理によって新たに形成されたことを示していると考えられる。

一方で，スガレッリ小路からカルチェリ通りにかけてのエリアでは，サン・ビアジオ・デッラ・パニョッタ教会 *Chiesa di San Biagio della Pagnotta* を含む街区の壁体と反対側の街区の壁体が共に同じ角度でジュリア通りに斜交しているのに対して，サンタ・ルチア・デル・ゴンファローネ教会を含む南側のエリアはジュリア通りを挟んで共に直交する壁体によって構成されている（図３）。この一帯は，バンキ通りに面した教皇庁の公文書局 *Cancelleria* とブラマンテの設計による裁判所 *Tribunali* によって新たなローマの政治的中心となるはずの場所であった。タフーリの説によれば，ジュリア通りとバンキ通りに挟まれた街区が取り壊されて広場になり，バンキ通りの公文書局とジュリア通りの裁判所が対峙するはずであった[11]。ブラマンテの裁判所が 1511 年には工事が中断され，ユリウス二世が 1513 年に亡くなると計画も中止され実現しなかったため[12]，この街区は破壊を免れることとなった。この部分は，バンキ通りが湾曲してテヴェレ川に最も接近している部分でもあり，一様に斜交する壁体は，ジュリア通り敷設前の段階においても既存市街地がテヴェレ川岸付近まで到達していたことを示唆していると考えられる。

注2　これには，元々市街地化が進んでいなかった場合とジュリア通りの敷設後に建物を取り壊して建物が新築された場合が含まれる。
注3　これには，既存市街地にジュリア通りが貫入した場合と市街地化は後でもジュリア通り以外の都市軸が支配的である場合が含まれる。

一方で，ジュリア通りを挟んで両側の街区が直交する壁体で構成されている部分については，バンキ通りがジュリア通りとほぼ平行になる地点でもあり，ブラマンテは中世の市街地の軸と新しいルネサンスの都市軸とが接近し一致する地点を選んで公文書局と裁判所による公共空間を挿入しようとしたと考えることも可能であろう[注4]。

3-3　ジュリア通り南部

バルケッタ通りからカテリーナ通りにかけてのエリアでは，ジュリア通りを挟んで南西側と北東側の両街区ともに通りに直交する壁体によって構成されている（図４）。最もジュリア通りの都市軸が街区に対して支配的なエリアということができるが，モンセラート通りに面した部分はモンセラート通りに直交する壁体が並び，ジュリア通りと直交する壁体と中庭を介して交錯している。

サン・ジロラモ・デッラ・カリタ通りからシスト橋に至るエリアでは，ジュリア通りとテヴェレ川岸の間が狭まり，ジュリア通り南西側の街区を構成する壁体は原則として通りに直交しているが，北東側の街区ではモンセラート通りから伸びるジュリア通りに斜交する壁体で構成されている（図５）。パラッツォ・ファルネーゼは枢機卿アレッサンドロ（後の教皇パウルス三世）によって購入された後，ジュリア通りとほぼ同時期に大規模な増改築を行っているが，ここではジュリア通りではなくモンセラート通りからヴェンティ小路を経てカポ・ディ・フェッロ通りへと続く都市軸，もっと言えば古代ローマの街路システムに沿って計画されたことになる[13]（図６）。

パラッツォ・ファルネーゼの計画については，視覚的な軸線が異なる空間を連結する仕掛けが施されていると指摘されている[14]。このパラッツォ・ファルネーゼは，アントニオ・ダ・サンガッロ・イル・ジョーヴァネの設計により建設が開始されたが，アントニオの死後はミケランジェロ・ブオナローティによって建設が進められたことで知られる。教皇パウルス三世のためにミケランジェロが構想した壮大な計画とは，パラッツォからテヴェレ川対岸にあるヴィラ・ファルネジーナの庭園や館に歩いて行けるようテヴェレ川に橋を架け，視覚的には館の前面にあるカンポ・ディ・フィオーリ広場からパラッツォの入口を通って中庭，庭園，ジュリア通り，さらに橋を渡って対岸の庭園まで一直線に軸線を通すというものであった[15]。この一直線の軸によって，テヴェレ川を挟んだ都市的な規模の空間の連結が構想されたのだ。建築を中心にして，広場，中庭，庭園，橋，再び庭園というミケランジェロの全体構想は，一つの建築が世界の中心に位置していることを示したものと言える[16]。しかし，パラッツォ・ファルネーゼはジュリア通りに直交する軸を想定してはいない。この都市的な規模で空間の連結を生じさせる一直線の軸とは，ジュリア通りに直交する軸ではなく，テヴェレ川に平行する古代ローマの街路システムテに直交するものであった。

ファルネーゼ家は 1540 年以降，パラッツォの周辺の不動産を購入してファルネーゼ家と関わりのあるものを住まわせるようになり，その都市的介入はパラッツォ・ファルネーゼ単体ではなく周辺の市街地を含む都市組織の改変にまで及んだ[17]。サン・ジロラモ・デッラ・カリタ通りからシスト橋に至る街区において，壁体がジュリア通りに斜交しパラッツォ・ファルネーゼと平行しているのはそのためであり，中世的都市組織の名残ではなく，『古代ローマの復興』を都市組織のレベルで実現しようとしたルネサンス的都市空間の現出と解釈する方が妥当であろう。

４．むすび

本稿では，1508 年にローマ教皇ユリウス二世によって行われた都市改造の一つであるジュリア通りに着目し，直線道路の敷設による都市組織の変化について街区を構成する壁体と道路の向きから考察を行った。ルネサンスからバロック期にかけての直線道路の敷設については，その透視図法的効果のみに関心が集まりがちである。しかし，直線道路の敷設は既存の都市組織への「外科手術的」な介入であるだけでなく，新たなファサードの建設を通して街区内へと浸潤する直交軸を誘発する緩慢な都市組織の改変であることも明らかになった。個々の街区においてジュリア通りの敷設に

注4　ヴァザーリはローマにおけるフィレンツェの商人とシエナの商人のそれぞれの拠点を隔てる緩衝地と指摘している。Salerno, L., Spezzaferro, L. and Tafuri, M. (1973) p.315

よってどのような変化が起こったのかについては，史料的裏付けを元に更に慎重に考察する必要があるが，一律なファサードの連続から均質に思えるジュリア通り沿いの街区の都市組織が多様であることを示した。パラッツォのファサードに見る都市組織の違いあるいは中世街区との比較については稿を改めたい。

謝辞

本稿の元となった調査（2013 年 9 月）では，井澤沙綾氏（2013 年度卒業生）ならびに岡本芽衣氏（大学院修士２年）の協力を頂いた。ここに謝意を表したい。また，ジュリア通り周辺域の様々なデータを提供いただいたローマ大学サピエンツァ建築学部都市計画学科地図資料室のスタッフにも感謝する。

本研究は，日本学術振興会科研費基盤研究費(C)24560791 の助成を受けた研究の成果の一部をまとめたものである。

参考文献

1）中嶋和郎：ルネサンス理想都市，講談社，198 (1996)
2）陣内秀信：都市を読む＊イタリア，法政大学出版局，158 (1988)
3）石川清：日本建築学会計画系論文集，**471**，175-183 (1995)
4）陣内秀信：前掲書，159-160 (1988)
5）片山伸也：日本建築学会計画系論文集，**662**，869-875 (2011)
6）陣内秀信：前掲書，160 (1988)
7）陣内秀信：前掲書，160 (1988)
8）Guidoni, E.：L'urbanistica di Roma tra miti e progetti, Editori Laterza, Roma-Bari, 112 (1990)
9）佐々木学：日本建築学会計画系論文集，**594**, 5 (2005)
10）Polla, E.：Centro Storico di Roma, Kappa, Roma, Tav. D217-246 (2013)
11）Salerno, L., Spezzaferro, L. and Tafuri, M.: Via Giulia: Una Utopia Urbanistica Del 500, A. Staderini, Roma, 66-76 (1973)
12）佐々木学：前掲書，4 (2005)
13）Guidoni, E. (cura di): Carta del Centro Storico di Roma 1:1000 Foglio38-Campo de'Fiori (1985)
14）岩谷洋子，奈尾信英：駒沢女子大学研究紀要，**13**，55-71 (2006)
15）岩谷洋子：日本建築学会関東支部研究報告集，343 (2006)
16）長尾重武：建築巡礼 5　ミケランジェロのローマ，丸善株式会社，69-70 (1991)
17）Salerno, L., Spezzaferro, L. and Tafuri, M.：前掲書，104 (1973)

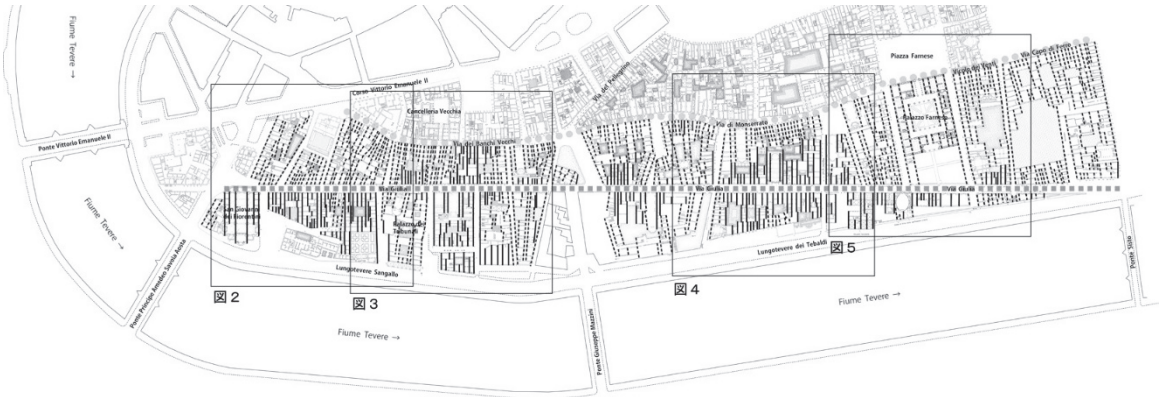

図 1　ジュリア通り周辺連続平面図

写真１　ジュリア通り

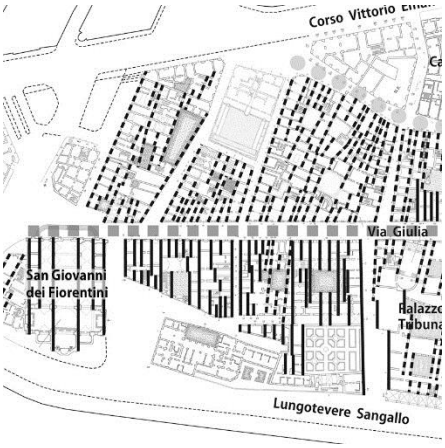

図２　サン・ジョヴァンニ・バッティスタ・デイ・フィオレンティーニ東側

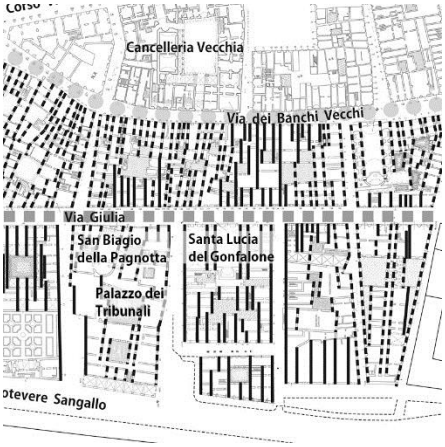

図３　裁判所 Tribunari 付近

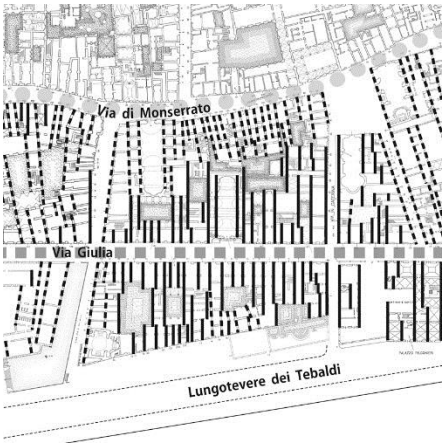

図４　サンタ・カテリーナ・ダ・シエナ教会付近

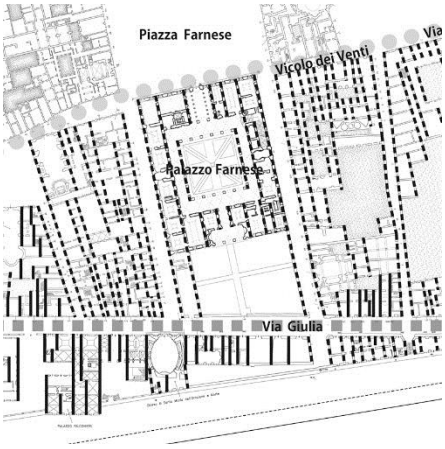

図５　パラッツォ・ファルネーゼ付近

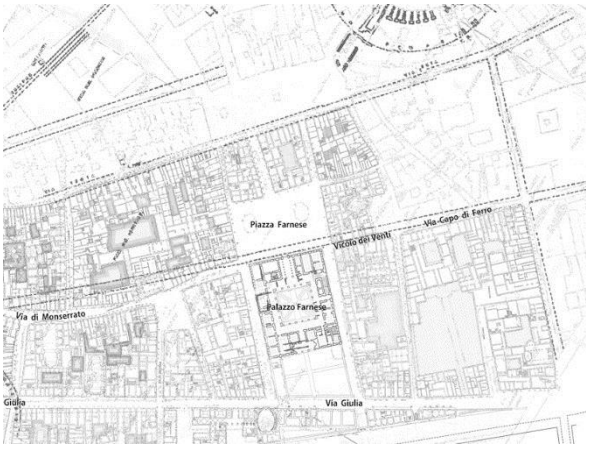

図６　古代ローマの街路システムとパラッツォ・ファルネーゼ（連続平面図に E.Guidoni (1985)を合成）